

# 大津百町瓦版

大津・町家・まちなか・いろいろ情報

春季号 [No. 39]

2019年 4月

発行 大津の町家を考える会

大津市中央1丁目8-13

TEL・FAX 077-527-3636

Email: otsu.machiya@gmail.com

高さ8Mもある大津石場港にあった常夜燈、江戸末期弘化二年(一八四五)に建てられました。



## 石場港は大津随一の港

この立派な「常夜燈」は現在びわ湖ホール横の湖岸寄りに建っています。元々は現在の天津警察署付近にあった江戸時代の船着き場・石場港の一角に建てられていたものだそうです。過去、何度かの移転を余儀なくされ現在地に移ってきてきた元姿を保っています。

この常夜燈をよく見てみると、基壇の部分に建設しようとした発起人の名前「鍵屋傳兵衛」や「舟持中」(いまで云う船主)が大きく刻まれ、さらに近在の江州の村々や在所の名前の他、個人の名前が無数に刻まれています。それらをじっくり読んで見ると、草津宿、石山濱、勢多濱、大萱、石部、日野、富川村、千野村、鳥居川、龍門村、そして旧大津湖岸にあった米蔵の名前も彫られています。さらには京三条宿、西洞院五条、大阪、尾州・名古屋方面の方々や工事を請け負った業者の名前も彫られているのです。

『矢橋の帰帆』として近江八景の一つにもなっている矢橋と石場の渡し舟は江戸末期大いに賑わいました。それはお伊勢参りや観音信仰が一般庶民に広まったことで旅する人々が増え、渡し舟も不足する状況だったそうです。

立派な石場の常夜燈はこうした時代の要請を受け、港を利用する舟事業者や庶民の多くの浄財によって建てられたのです。石場港の賑わっている様子は、四国・香川にある『金刀比羅宮』の奉納絵馬に荷を運ぶ舟や人々が乗り降りする様子等が描かれている事から良く分かります。その奉納絵馬にはこの大きな常夜燈も描かれています。絵馬は嘉永六年(一八五三)奉納されており絵馬の下方には奉納した人々三五人の名前が記されています。そこに少し大きめの文字で「高橋傳兵衛」と書かれており、常夜燈の基壇に発起人として彫られている「傳兵衛」氏と同一人物かと思われます。この様な歴史的建造物は当時の場所にあつてこそ、その価値があるのではと思われれます。

【会員 雨森】